

所在地 宮城県仙台市宮城野区東仙台6丁目
立地環境 台原・小田原丘陵の標高約27～40mの丘陵東端部
発見遺構 瓦・須恵器窯、灰原、溝
年代 7世紀末～8世紀初頭

遺跡の概要

大蓮寺窯跡は仙台市北部の台原・小田原丘陵の標高約27～40mの丘陵の東端部に位置する（第1図）。これまで昭和50（1975）年と平成2・3（1988・1989）年に発掘調査が行われ、5世紀代の須恵器窯と、7世紀末～8世紀初頭頃の須恵器窯と瓦窯が発見された。またそれ以前から瓦が採集されており、その存在は知られていた。

大蓮寺窯跡から西側の台原・小田原丘陵の南裾、東西約4.7km、南北約1.8kmの範囲には古代の窯が数多く作られており、これらは「台原・小田原窯跡群」と総称されている。現在まで調査された窯の数は約100基にも及ぶが、開発により隠滅した窯も相当数に及ぶものと推測される。窯跡群で生産された瓦や須恵器は、陸奥国分寺や国分尼寺、多賀城などに供給されていたことが知られている。その一方大蓮寺窯跡は台原・小田原窯跡群の中でも最も東側、梅田川の下流側に位置しており、操業時期は多賀城創建以前に遡ることが知られている。

1975年に古窯跡研究会により行われた調査では5世紀代の須恵器を焼成した窯と、方形のテラス状の遺構が検出されており、このテラスの壁際に土留めのような形で瓦が据えられていた。平瓦は格子叩きと、格子叩きを一部ナデケシ調整されたもの、平行叩きのものが出土している。丸瓦の出土数は少ないがいずれも無段で凸面にナデケシ調整が施されている。またロクロ挽き重弧文軒平瓦も出土している。

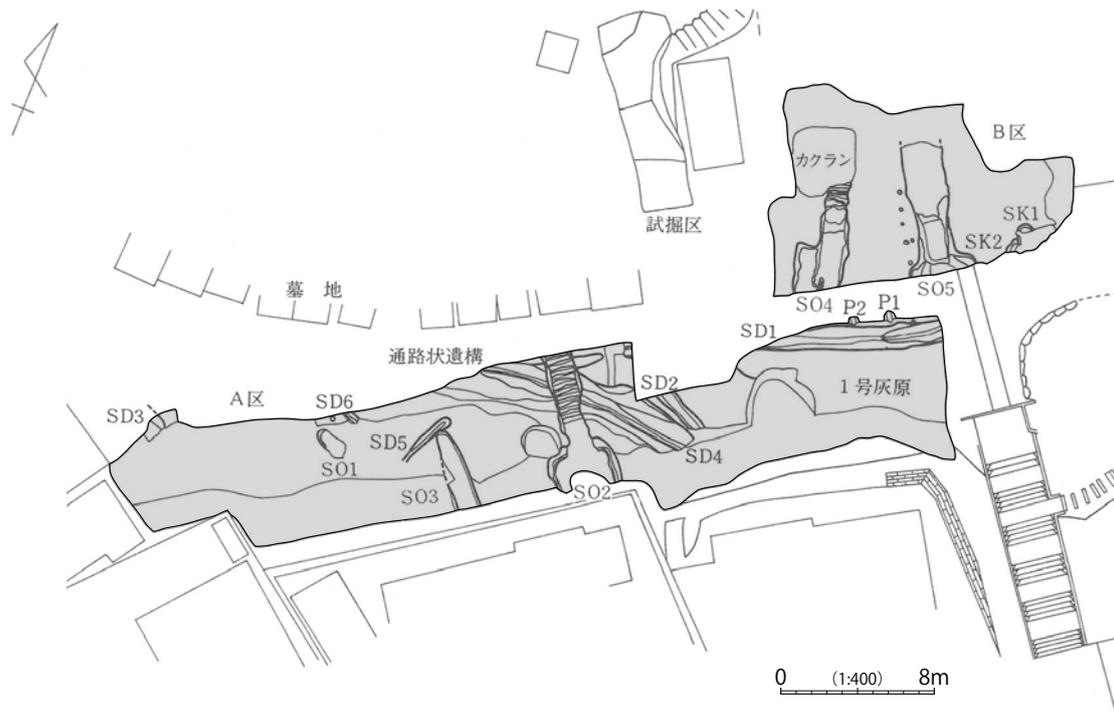
1990年と1991年に仙台市教育委員会により行われた第2・3次調査では、窯5基、灰原1ヶ所、溝6条、通路状遺構1ヶ所、土坑2基が検出されている（第2図）。2・4号窯は底面の構造から有階式の瓦窯であると考えられる（第3図）。2・4・5号窯や灰原、溝などから丸瓦、平瓦（桶巻造り）、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦、塼などが出土している（第4図）。出土した瓦は叩き目の種類で格子叩き（Ⅰ類）、平行叩き（Ⅱ類）、短縄叩き（Ⅲ類）の3つと、全面ナデ調整（Ⅳ類）と調整不明（Ⅴ類）に分類されている。Ⅰ類は格子の形状（斜、正方形、長方形）の違いでさらに細分される。また異なる叩きを用いて成型を行ったものも存在し、これについては分割後に二次成型が施された可能性が考えられる。

平行叩きが施された丸瓦と平瓦の中にも、模骨からの分割後に凸型台を用いて二次成型が施された特徴が顕著に現れるものが存在し、断面形状が「」形の平瓦や、断面形状が型をした丸瓦などが存在する。

軒丸瓦の文様は重弁八葉蓮華文で、直径は約16.5～17.0cmを測り、内区と周辺の間には1条の凸圏線が巡る。内区は直径約11cmで花卉と間弁と中房が存在し、花卉はやや平坦で子葉は細長い棒状を呈する。間弁は花卉を取り囲みその端部は盛り上がり銀杏葉形を呈する。中房は直径約3.8cmの円



第1図 大蓮寺窯跡と周辺の遺跡



第2図 大蓮寺窯跡 第2・3次調査区 (仙台市 1993 に一部加筆)

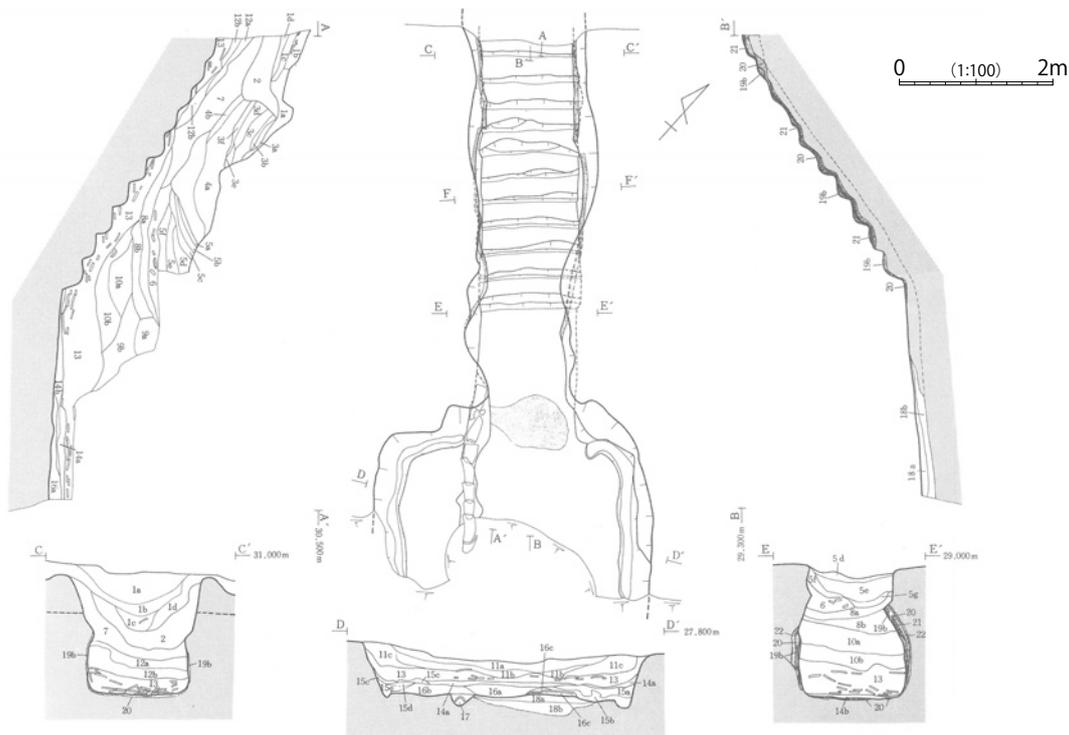
形で、中央に1個と、その周囲に6個の蓮子を取り付く。文様の祖型については群馬県伊勢崎市の上植木廃寺の例が挙げられ、類似例としては大崎市名生館官衙遺跡の軒丸瓦を挙げるができる。

軒平瓦は調査区全体で298点出土しているが、いずれもロクロ挽き重弧文である。その内279点が5号窯、1号灰原、1号溝から出土しており、有段のものがⅠ類でそのうち正格子叩きのものをⅠa類、平行叩きのものがⅠb類、ナデ調整で叩き目が不明なものがⅠc類である。また無段のものがⅡ類で平行叩きがⅡa類、ナデ調整がⅡb類である。

各遺構の年代については、1号灰原と1号溝は堆積状況からほぼ同時期のものと推定される。両遺構から出土した須恵器の蓋の口縁部には返りが存在(報告書ではA群土器として分類)することなどから、7世紀末頃に比定されている。それに対して5号窯から出土した須恵器の蓋には返りが存在しない(報告書ではB群土器として分類)など比較的新手の様相を示すことから、両者には時期差を認めることができる。

また各遺構から出土した平瓦・丸瓦の叩き目による数量による出土構成比は、1号溝と1号灰原では平瓦はⅣ類(ナデ調整)がそれぞれ62.9%と68.4%と最も多い。またこれにⅠ類(格子叩き)が17.9%と12.9%で、Ⅱ類(平行叩き)が12.6%と19.4%とほぼ同数の割合で出土している。これに対して縄叩きは5.9%と10.7%と割合が低い。丸瓦はⅠ類(格子叩き)が1号溝と1号灰原で27.9%・36.8%出土し最も多く、それにⅣ類(ナデ調整)が18.5・25.8%で続き、さらにⅡ類(平行叩き)が17.1・19.0%の割合を占める。それに対して縄叩きは5.9・10.7%と少数である。また断面形状が「 \surd 」形を呈するものは出土していない。

それに対して5号窯では平瓦がⅠ類(格子叩き)とⅢ類(縄叩き)が28.6%で最も多く、これにⅣ類(ナデ調整)が21.4%、平行叩きが10.7%と続く。4号窯ではⅢ類(縄叩き)が78.9%と最も多く、これにⅣ類(ナデ調整)が17.5%、Ⅰ類(格子叩き)は1.8%と激減する。2号窯でもⅢ類(縄叩き)が69.4%と主体的であることは変わらず、これにⅣ類(ナデ調整)が15.7%、Ⅰ類(格子叩き)が11.1%と続く。丸瓦はⅢ類(縄叩き)が52.7%で、それにⅠ類(格子叩き)が15.0%、Ⅱ類(平



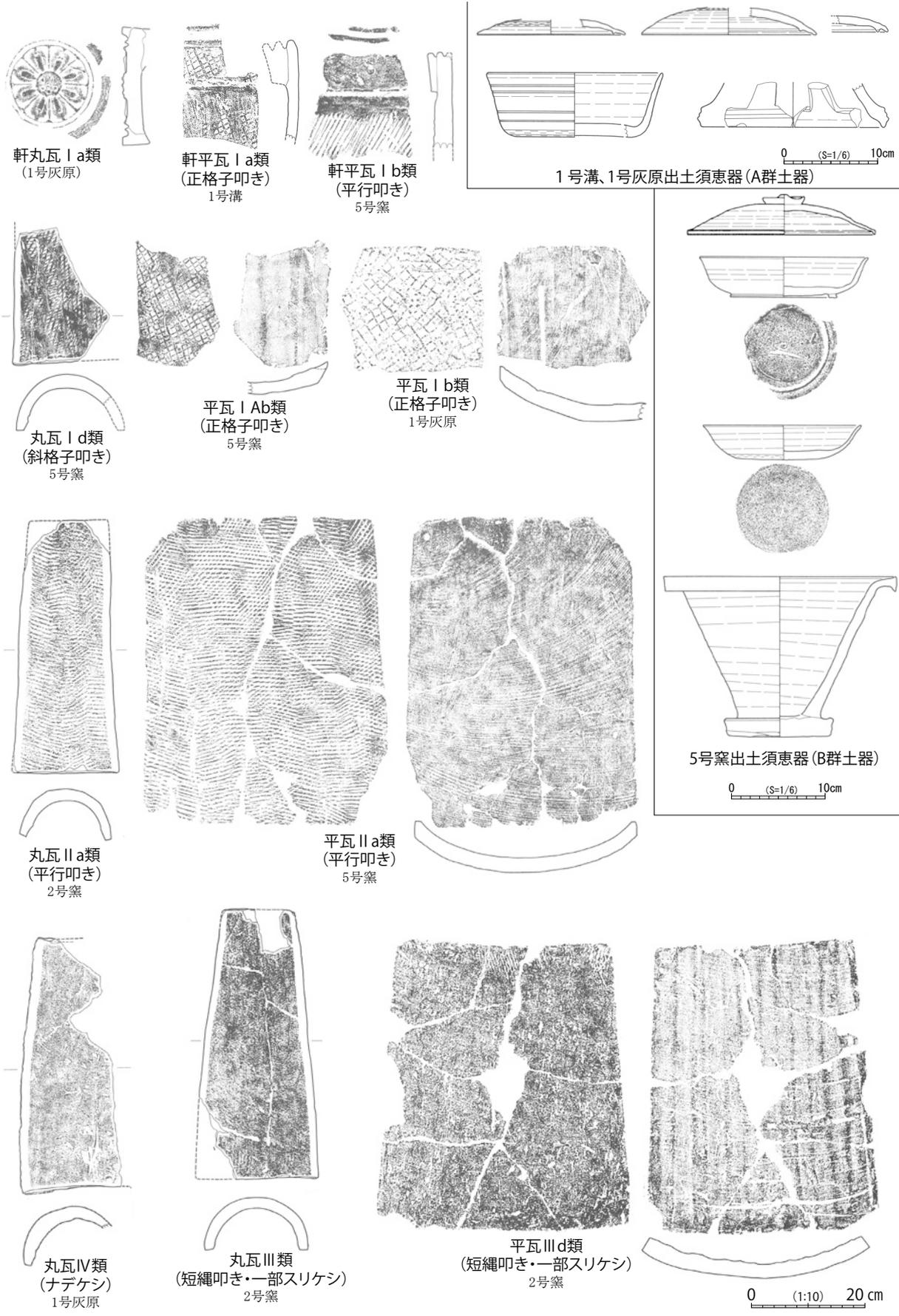
第3図 大蓮寺窯跡 S02 窯平・断面図 (仙台市 1993)

行叩き)が13.2%と続く。さらに4号窯ではⅢ類(縄叩き)が78.1%、2号窯では94.8%を占めるまでになる。このように1号灰原・1号溝→5号窯→4号窯・2号窯と変遷をたどるにつれ、瓦の叩き目は縄叩きが主体的になる傾向が見て取れる。

瓦の供給先としては遺跡の北東約1.8kmに位置する燕沢遺跡があげられる。燕沢遺跡からは前述した重弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめ、桶巻造りで同様の叩きを用いた平瓦や凸型台二次成型を施された丸瓦などが出土している。また軒丸瓦の文様は異なるものの、丸瓦や平瓦の一部は窯跡の南南西約7kmの位置する、当時の陸奥国府であった郡山遺跡の官衙域にも供給されていた可能性が高いことが最近指摘されている(及川2021・2022)。そして製作の際に使用された叩きや、成型技法も多様であることから、様々な地域の系譜をひいているものと推測される。

関連文献

- 伊勢崎市教育委員会 2002『上植木廃寺 上植木廃寺瓦窯』伊勢崎市文化財調査報告書第44集
- 伊勢崎市教育委員会 2009『新屋敷遺跡 上植木廃寺周辺遺跡Ⅱ 上植木廃寺 埋蔵文化財発掘調査概報』伊勢崎市文化財調査報告書第94集
- 出浦崇 2012「上野国から見た陸奥国 —上植木廃寺出土軒丸瓦との対比から—」『古代社会と地域間交流Ⅱ —寺院・官衙・瓦から見た関東と東北—』
- 及川謙作 2021「陸奥国府における造瓦技術の受容と変遷(1) —郡山遺跡と大蓮寺窯跡の瓦を中心に—」『宮城考古学第22号』
- 及川謙作 2022「陸奥国府における造瓦技術の受容と変遷(2) —大蓮寺窯跡と東北各地から出土した瓦との比較を中心に—」『宮城考古学第23号』
- 岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
- 古窯跡研究会 1976「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告書」『陸奥国官窯跡群Ⅱ 研究報告』
- 仙台市教育委員会 1993『大蓮寺窯跡 —第2・3次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第168集
- 仙台市教育委員会 1996『仙台平野の遺跡群XV —平成7年度発掘調査報告— 燕沢遺跡第9次調査など』仙台市文化財調査報告書第211集
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編』仙台市文化財調査報告書第285集
- 長島栄一 2009『郡山遺跡 —飛鳥時代の陸奥国府跡—』同成社



第4図 大蓮寺窯跡出土遺物 (仙台市 1993 から作成)